

枇杷の家

緑川 有

●登場人物

椿 風子 (つばき ふうこ 六十三歳)

柳原 薫 (やなぎはら かおる 六十三歳)

牧野月子 (まきの つきこ 五十八歳)

徳永銀次郎 (とくなが ぎんじろう 自称六十七歳)

●時代…現在

●場所…とある住宅のリビング

テーブルや椅子、ソファが配置されたりビング。壁に掛かっている絵や置かれていた花瓶、カップボードなど調度品は、どこかちぐはぐで統一感がない。二階に続く階段も見える。正面真ん中に大きなひとつの窓がある。季節は五月。窓からは、実をたわわに付けた一本の大きな枇杷の木が見えている。薫がソファに寝そべって本を読んでいる。固定の電話が鳴るが、ちらっと見ただけで出る気配はない。長く呼び出し音が鳴っていたが切れる。

薫

(読んでいる本を遠くにしたり近くにしたりしながら) ああー、また老眼が進んだみたい。ほんまに不自由やわー。

薫、本をテーブルに投げ出す。そこに玄関の方から慌てた様子で、声をあげながら月子が登場。

月子

ただいまー。薫さん、薫さん、居るの？ 大丈夫？ 生きてます？

薫

あら、月子さん、お帰りなさい。どうしたの？ 何、慌ててるの？

落ち着きがないわね。

月子、薫の姿を見てほっとした様子。

月子

ああー、よかった。何度も電話したんですよ。

薫

あーら、そう？ 何かあったの？ 携帯、部屋に置いたままだったわ。

月子

(固定の電話を指差して) この電話にだって三回も電話したんです。居たのならどうして出ないんですか。どこか道に倒れて、のたれ死にしていますかと思っただけ心配しましたよ。

薫

中島みゆきじゃないんだから、そうそう道に倒れたりなんかしないわよ。

月子

何の話ですか。固定電話が鳴った時は、近くにいる人が出るって、これ、一応、この家のルールなんですけど。

薫

だって、その電話にかかってくるのは、たいがい風子さんでしよう。(声色を変えて) 風子さんはただ今、海外旅行中です。さあー、いっお帰りだったかしら。ご用件承っておきましょうか？ なんて対応しなくちゃならないの、面倒やわー。で？ 何？ 何で私がのたれ死にしないかならないの。

月子 ああー、いつかこんな日が来ると思ってた。覚悟はしていたけど。三人のうち、誰が最初にこんな悲しい状況に直面するのかしら、と考えるはいたけれど。ああー、恐ろしい。(まじまじと薫を見つめて) とうとう来てしまった。

薫 いったい何よ。その憐れんだ顔、私は何だっけ言うのよ。

月子 ああー、ダメだわ、やっぱり。ほんとうに覚えてないんだ。

薫 だから何よ。(苛立った様子)

月子 今日、二時から何か大事な予定がありました。(きよんとしている薫に畳み掛ける) さて、何でしたでしょうか? よーく思い出しましょう。とっても大事な、もちろん、薫さんにとってですよ。ヒント一、薫さんの大好きなハンサムな俳優、タマちゃん(間)。まだ、来ないわね。じゃあ、次ぎのヒント、場所は池袋。

薫、この時点で気付いた様子。

薫 ああー! まさか、忘れてた!

月子 そう、失念されていたようですね。タマちゃんの芝居、薫さんがどう

しても観たいからネットでチケット取ってほしい、一緒に観に行こうって私を誘ったんですね。今朝、私が出かける時、二時に直接劇場で会いましょうって約束しましたよね。私、今日中に仕上げなくちゃならない仕事をかかえていて、正直言って、ドタキャンしたかったの私のほうですよ。いくら待っても横の座席は最後まで空いたまま。終わって何度電話しても出ないから、本気で死んでるかと思ったわ。

薫 あらー、嫌だ。何で、何で? (月子にすがりつくように) 私、どうしたのかしら。そうよ、思い出した。昨日までずっと覚えていて、楽しみに待っていた芝居だったのに。嘘、これって、認知症? すなわち、ざつくばらんな言い方するとボケっていうやつ……いやだ、このまま、こんな事繰り返して、ボケ老人になっていくのかしら。

月子、薫のあまりの落ち込みように態度を変える。

月子 まあー、認知症ってほどじゃないと思うわ。(薫をじっと観察しながら) たぶん。(間) そういうことってたまにある事ですよ。

薫 (月子にすがりつくように) たまにあるかしら?

月子

ええー、私だってあります。例えば、ほら、ここでお茶を飲んでいました。そうだ、頂き物のお菓子があつたはずだわ、あのお菓子を食べよう、と明確な目的を持ってキッチンに向かったはずなのに、あれー、何しに来たんだったけ？って、もうすでにお菓子を食べたいという欲望すら忘れてしまっている。道で人に会って、調子良く話合せてるんだけど最後まで名前が思い出せない、と、まあー、こんなことも度々あるわ。仕事の場合だと笑ってられないですもんね。大事な用で電話を掛けたはずなのに、先方が出た途端、取り次いでもらう担当者の名前がすつとんで、真っ白になって、仕方ないから間違ひ電話の振りして電話切ったこともあるわ。

薫

あらー、ひどいわね。月子さん、あなた、もしかして、それって、認知症始まつてるかもよ。大丈夫？ 五十代で認知症だと若年の分野に入るのかしら。何か対策考えないと危ないわね。

月子

いや、私のことはさておき、今は薫さんのことですよ。

薫

ああー、そうだった。人ごとじゃなかった。ほんと、自分で自分が信じられなくなったわ。(ガクツとうなだれる)

月子

まあー、そんなに落ち込まなくても。風子さんなんか、眼鏡がない、

鍵がどこかに行った、なんていつも探し物してますよ。鍵は勝手に出歩かないですけどね。そういうことって、歳を取れば多かれ少なかれ、みんなあるわ。三人で暮らしているんだから、お互いフォローし合っ

薫

てやっていけば何とかありますよ。
あら、あの人の場合はフォローし合う範疇を越えてるかもよ。この頃、何だか変だし。ずっと専業主婦だったのに、いつの間にか女優になつてたのよ。女優になりたかつたっていう若い頃の夢と現実が交錯しているっていうか、妄想ね。

月子

そうなんですか？ 風子さんの夢が女優だったなんて、初めて知りました。

薫

昔女優だったって、宅急便のお兄ちゃんに、聞かれもしないのに嬉しそうに話してるの聞いちゃつたの。「あたしね、これでも昔、女優だったの。演技派のね。うふふふ」なんて。演技派って言うところが、謙虚と言えば謙虚ね。美貌では勝負出来ないって、一応自分で認識しているみたいね。

月子

そういう悪態ついてるうちは大丈夫ですね。薫さんと風子さんで、ほんと、仲いいんだか、悪いんだか。二人は学生の時からのお友だちでしょ

う。考えると四十年以上もの長い付き合いってことですよ。

薫 あなたと出逢ったのはいつだっけ？ 学生の時だったかしら？

月子 しっかりしてくださいよ。最初に会ったのは、確か二十年ほど前。私が薫さんの会社の工場の取材に行った時、広報にいた薫さんが案内してくれたんじゃないですか。そのあと、何日かしてバツタリ中華料理店で。

薫 そうそう、そうだった。まるで最初から約束してたみたいに同じテーブルに座って、身の上話なんかで盛り上がって、確か、紹興酒二本ほど二人で空けたわね。

月子 あれから長い月日が経ちましたね。(我に返ったように) わあー、大変、あれからの月日なんて思い出にふけている場合じゃないわ。急いで原稿上げなくちゃ。

月子、慌てて二階に向かう。月子の背に薫が聞く。

薫 お仕事頑張ってる。ところで、芝居は面白かった？ タマちゃん、かっこ良かった？

月子 (声だけが聞こえる) ひどい芝居だった。薫さん、忘れててラッキーだったかも。

薫 なんだ、よかった。でも、忘れててラッキーというのも何だかなー。

薫、再び座って本を手にとる。そこに風子が旅行用の大きなスーツケース押しながら玄関の方から登場。

風子 ただいまー。高速道路が混んで、すごく時間かかった。

薫 (ソファに寝転んで本を手にしたまま) おかえりー。

風子、薫の向かいに座って、両手を伸ばし、くつろぐ。

風子 ああー、やっぱり、我が家はいいわね。旅って、家に戻って来た時のほっとする感じ、これがいいのかもね。

薫 (本から、ちらりと目を離し) どうだった？ パリは。

風子 (待ってましたとばかりに) よかったわよ。なんていうか、パリって何もかもおもしろなのよ。下町の小さなホテルに泊まったんだけど、

雰囲気がつってもいいの。例えば、粗末なベッドのはずんだけど、ヘッドのところ（あきらかに興味なさそうに）に細かい細工がしてあったり、壁紙の模様がヨーロッパアンカラー（あきらかに興味なさそうに）っていうの？ 中間色の淡い色調がシックなの。朝食なんて、カフェオーレとクロワッサンだけしか用意されてないんだけど、その質素さが、また、いいんだわ。

薫 （あきらかに興味なさそうに）へえー、質素さがねえー。

風子 建物の窓辺にはどの窓にも鉢植えの花が並んでいて、石畳の路地に立って、ぐるっと見渡すと、トリュフォーの映画の主人公になったみたいだったわ。ほら、覚えてる？ 「隣の女」って映画、素敵だったわよね。

薫 ああー、あのエッチな、妄想と思ひ込み満載のめんどくさい映画ね。

風子 あなた、世界のトリュフォーに失礼ね。あなたには、あの苦しく切ない愛の形が分からないのよね。

薫 はい、分かりませーん。

風子 それでね、坂道には小型のフランス車がきれいに縦列駐車していて、それだけでも、何か風景が素敵なのよね。

薫 ええー、また、そこに戻るの。

風子 それとね、美術館の前でホームレスのおばあさんが物乞いをしていたんだけど、それすら映画のワンシーンみたいで、素敵に見えるの。

薫 ホームレスのおばあさんが素敵に見える、なるほどねえー。それって、表面だけ見て、本質から目をそらせているってことじゃないの？

薫、本から目を離さないまま。風子、薫の読んでいる本を見る。

風子 あら、「シャーロック・ホームズの事件簿」、中学生のミステリーね。

薫 中学生のミステリー、はないでしょう。軽く見ちゃあだめよ。こういう基本的なミステリーを読み込むのが面白いのよ。こういうのを上質のミステリーっていうのよ。

風子 ふうーん、一昨年までは数独パズル手放さなかったのに、どうしたの？ あなた、そんなにミステリー好きだったっけ？

薫 と年齢とともに趣味は変わるのよ。

風子、旅行鞆から何やら額に入った絵のようなものを取り出して
いる。三本のワインも取り出してテーブルに並べる。額の絵を満
足げにながめると、立ち上がって壁に掛かっている絵と取り替え
る。新たに掛けた、マルがただ三つ並んでいるだけの抽象画とも

いえない絵を、近付いたり離れたりしながら満足げに眺めている。

風子 薫さん見て。どう？ 斬新な絵でしょう。

薫 (本から顔を上げて、ちらりと壁に視線を向ける) どうしたの？ それって、絵画ってジャンルに入るの？

風子 いやーね、もちろんよ。パリで出逢った若い画家の作品よ。

薫 (本に顔を向けたまま) パリのどこで出逢ったの？

風子 セーヌ川のポンヌフの橋の袂で。絵を描いている本人が絵のようだったわ。

薫 へえー、絵のような画家ってどんなビジュアル？

風子 映画「ベニスに死す」の美少年みたいだったのよ。

薫 あらまあー、素敵なこと。それで思わず絵を買ってしまったんだ。で、いくらで買ったの？

風子 二千ユーロ。

薫 そう、二千ユーロ。一ユーロが百三十円くらいとして…(計算して驚く) ええーっ、二十六万円？

薫、立ち上がって、壁に近付き、絵をまじまじと見る。

薫 これが？ 二千ユーロ。これって、マル描いて並べているだけじゃない。

絵じゃないでしょう！

風子 あなた、そういう発想はどうかしら。芸術が理解できない人って、これだもんねー。ピカソの絵だって、そういう見方しか出来ない人って、いるもんね。子供の落書きだ、なんてね。

薫 ピカソねえー。

薫、呆れた様子でソファァーに戻り、ワインを手に取って眺めている。

薫 こんな重いもの、わざわざフランスから買ってきたの？

風子 お土産よ、感謝してね。ボルドーワインの最高級品、ものすごく奮発したんだから。カベルネ・ソーヴィニヨンから引き出される優雅でエレガントな香り。優雅とエレガントが薫さんと月子さんに、分かると思えないけど、まあー、いいわ。

薫、風子のおしゃべりに、ややうんざりした様子。

薫 ありがとう。ちなみに優雅とエレガント、重複ちようふうくしてるわよ。とりあえず、

お疲れでしょうから、お風呂でも入ったら？ あつ、お風呂入れたら、そのままおいといて、後、私、入るから。

風子 ねえ、普通さ、長旅お疲れさん、お風呂の準備しておいたからどうぞつて言わない？

薫 言わない。別に私のために旅に出てくれた訳じゃないもの。まあ、とにかく、時差ほけもあるだろうし、夕食までの時間しばらくお休みください。

風子 大丈夫。あたし、ほら海外旅行なんて慣れてるから。ヨーロッパなんて、あたしにとったら、サンダル履きですぐその渋谷か銀座にでも出るようなレベルだから。それに、あたし、昔っから時差ほけしたことになるの。そういう体質なのね。

薫 渋谷まで一時間半も掛かるのに？ すぐそこ？ どうしてそんなところに見栄はるかな？ あなた、東松山市民でいることにコンプレックスあるんじゃないの？ それにね、時差ほけの認識はないかもしれないけど、顔にはしっかり出てるわよ。

風子、思わず顔に手をやる。

2

夜。テーブルに華やかなクロスを敷いて、薫、風子の二人がワインやグラスを並べたり、キッチンから料理の載った皿を運んだりと、食卓の準備で忙しく動き回っている。音楽（例えばシャンソン）もかかっている、風子は体でリズムをとりながら、時々立ち止まって、窓際の花を直したり、掛かっている絵の傾きを正したりしている。

風子 ねえ、月子さんはまだお仕事終わらないのかしら？

薫 まだみたいね。終わったたら降りて来るって言ってたから。一応、フランス土産のワインで宴会するって、伝えておいたわよ。

風子 あの人、仕事が忙しいのね。あなたもリタイアしてもう二年、私はまとも働いたこともないし、月子さんだけよ、現役で頑張ってるの。すごいじゃない。フリーのライターって、いったい何歳まで仕事できるのかしら？

薫

月子さんで、現役で仕事してるって何か自慢げよね。「私、八十になっても仕事続けるつもりよ。取材に行ったら、いったい誰だ？ あんな婆さんライター設定したのは、なんてまわりのスタツフがひそひそ話しているのが聞こえてきたりして。そこで私、しらーんふりして仕事続けてやるんだ。かっこいいでしょう」なんて言ってたけど、あの様子じゃあ、八十歳どころか、九十歳になっても仕事にしがみついているわよ。あーゆう老人が、若者の未来を邪魔してるんだよね。老人呼ばわりは早くない？ いいじゃない、うんと邪魔してやれば。若者にとっては、必要な試練よ。

風子

（ギョツとした様子で）すごいスタンスだね。そんなことツイッターで呟いた日にゃあ、世界中の若者、敵にまわしちゃうよ。ツイッターってなーに？

薫

知らないほうがいいかも。私も近寄らないけど、特にあなたみたいなの、思いつきであと先考えないでしゃべるタイプは命取りよ。

風子

あら、毒舌家のあなたに言われるなんて。ところで、薫さん、あなた、最近よく出かけるわね。それもおしゃれして、というか、ずいぶん若作りして。

風子

薫

別に若作りなんかしてないわよ。いつ見たのよ。

風子

いつだったかしら、スキップしそうなほど楽しそうに出かけるの、窓から見てたんだから。若作りよ。派手な柄のワンピースにリボンの付いた帽子まで被っちゃって。どこに行ったの？

薫

どこだっていいじゃない、いやーね、そういう詮索、やめてよね。プライベートは尊重するってルールでしょう。

風子

この頃、いろんな事件もあるし。おばさん相手にナンパして、老後の蓄えを根こそぎ、なんてことになったりして。

薫

あんたじゃないんだから。第一、こんな貧乏暮らしのおばさんターゲットにしても意味ないでしょう。変な想像しないで。

風子

でも、そうなったとしても、あたしは賛成よ。全てを賭けて、一瞬の恋の炎に身を委ねる、退屈な日々を送るより、その方がうんと幸せよ。自分の年齢に負けちゃだめ。（夢見るように）ああー、恋をしている時のあの感覚。昨日も今日も毎日のように会っているのに、別れた途端、また狂おしいほど会いたくなる。（急に芝居じみた台詞になって）あなた誰？ 夜の帳に身を隠し、あたしの名を呼ぶあなたは、もしや……。かってにやっつて。オープン見て来よう。（キッチンに去る）

薫

薫、テーブルに料理の皿を運ぶ。タイミングよく二階のドアが閉まる音がして、階段を降りて来る月子の足音が聞こえる。

風子 月子さん、お仕事終わったみたい。あの人は無駄がないわね。

月子 (階段から現れて) うわー、いい匂い。お腹空いたー。

風子 さあー、ワインパーティーの始まりよ。

三人、テーブルに着く。薫、開けておいたワインをグラスに注ぎ、乾杯して薫と月子、一気に飲み干す。

月子、薫 (同時に) うまーい！

風子 まったく、ただの酒飲みね。ワインをビールみたいに一気のみしちゃって。

薫 だから高いワインなんでもつたいないわよ。スーパーの七百円のワインと、この何とかっていうワインの違い、分からないから、私たち。

月子 あら、私は分かりますよ。

薫 どうかしら。

月子 たぶん、これ、二千円以上はすると思うわ。そうでしょう風子さん。

風子 (ちよっと不満そうに) いいのよ。もう、値段なんか気にしないで。あなたたち庶民は庶民の飲み方で楽しめばいいのよ。

月子 さすが、風子さん、太っ腹！

薫 じゃあ、庶民の飲み方で、おかわりください。(グラスを高く持ち上げる)

三人は料理を取り分け口にしつつ、このサラダのドレッシングは酸っぱ過ぎるなどと、何かと口をはさみながら、よく食べよく飲み続ける。月子、キッチンとリビングを行ったりきたり。この間、シルビーバルタンの「あなたのとりこ」が流れている。

薫 (ワインの瓶を逆さにしながら) あれー、いつの間にか三本とも空だわ。

ねえ、キッチンのシェア棚にウイスキー入れてるわよ。

風子 じゃあ、次ぎはウイスキーにしようか。

月子 私、用意してくる。(キッチンに向かう)

風子 (月子の背中に) 月子さん、悪いわね。いつも月子さん、働かせちゃって。

月子 気にしないでー。(キッチンから声だけ聞こえる)

風子 まあー、いいか。月子さん、三人の中で一番若いから。
薫 まあね。なんといってもまだ五十代だもの、若いわよね。

風子 まあー、世間一般的には、若い女性の範疇には入らないけど、相対的には、ここでは若いわね。

薫 そうよ、若いわよ。ねえ、ねえ、突然、思い出したんだけど、(可笑しそうに) あたしたち、寮にいた時、隠れてウイスキー飲んで、寮母に見つかってお説教されたの覚えてる？

風子 覚えているわよ。消灯十時だったものね。ドアの窓に黒のケント紙貼って灯りが漏れないようにして、みんなが集まって声をひそめて、たしか、あの時、コークハイだったわよね。

薫 そうそう、ウイスキーをコーラで割って、割ってというよりウイスキー垂らして、コーラの味しかなかったよね。

月子、ウイスキーの瓶とグラス、氷を運んでくる。

月子 すごい！ ウイスキー、『山崎』だったわ。薫さん、悪いわね。
薫 気にしないで、瓶は山崎だけど、中身は角だから。

風子 (ぎょっとして) わざわざ入れ直さなくても。

月子 (ウイスキーの瓶をしげしげとながめながら) 皆さん、水割りですか？

薫 コークハイいただける？

月子 そんなもんありません。ここは四十年前のスナックじゃありません。

風子 (思い出し笑いしながら) あの時の寮母、恐かったわよね。(声色変えて) ここをお開けなさい。ちゃんと分かっていますよ。何人集まっているのですか？ 何をしているのか、全部分かっていますよ。早くここをお開けなさい。ドンドン。

薫 そうそう。あの寮母、廊下をそおっと、足音しのばせてやって来て、突然ドアをドンドン、なのよね。キャーって大騒ぎして、ウイスキーの瓶隠して、窓開けて煙草の煙出して、バタバタやって。その間ずっと、ここをお開けなさい、の寮母の声が、地の底からの呪いみたいに響いていて。窓開けて煙出したって、匂いなんて消えやしないのに、あの頃、ほんとバカだよ、私たち。

風子 で、何とか繕ってドア開けたら、寮母が仁王立ちに立っていて、頭にカーラーが巻かれていて、頭がこんなに大きくなって、(笑い転げながら) もう可笑しくて可笑しくて、みんなで大笑いするものだから、寮母、

ますます怒っちゃって。

月子 二人ともそんな昔から大酒飲みの酔っぱらいだったんですね。

風子 考えたら、あの時の寮母さん、今の私たちより若いのよね。

薫 その寮母がね、あははは、何で寮母にばれたと思う？

月子 さあ、今みたいに笑い転げていたからじゃないですか？ 年頃も年頃だし。

薫 いいえ、静かにしてたわよね。あの寮母、わざわざ庭に出て、窓から漏れる灯りをチェックしてたのよ。私たちバカだから、廊下側の窓ばかり気にして、幕張ったの片側だけ！ あはははははっ。

風子 ほんと、まぬけよね。あははははは。

風子と薫、笑い転げて収拾つかないほどだ。

月子 そんなに可笑しいかなー？

薫 可笑しいわよ、(風子に向かって) ねえー。

風子 可笑しいわよー。

月子 私は経験ないけど、女子寮って楽しそうですね。

薫 楽しかないわよ、ねえー。大変なところよ。

風子 そりゃあー、もう規則は厳しいし、門限は八時でしょう。寮で唯一人の男性である門番のおじさんが、八時ぴったりにガラガラって門扉を閉めるのよね。毎日、何人かは閉まった門の前で、すみません、先生、開けてくださいーい、なんて悲痛な叫び声あげてたわ。

薫 それって、あなたでしょう、あなたよ。(笑いが止まらない)

風子 デートだって、あなた、八時じゃあ、何にもできやあしないわよ。

薫 何にもって、何よ。(まだ笑いが止まらない様子) 風子さん、何よ！

風子 いやだー、もう、きゃあー、やめて！

月子 だめだ、完全に狂ってる。

いつまでも笑っていた薫が、突然真顔になる。

薫 そうだ、思い出した。デートで思い出した。風子さん、あなた、ひどい女よね。

風子 何の話よ。

薫 中野の駅前、パン屋ランランのアルバイト、二人でしてたわよね。

風子 うん、したした。パンダみたいな名前のパン屋だったわね。売れ残った菓子パンお土産にもらったりして。あたし、あの店のメロンパンが好きだったなあー。

薫 メロンパンなんてどうだったっていいのよ。男子学生のアルバイト、山本君のこと、覚えてるでしょう。ヒョロッとしてたけど、繊細そうな綺麗な目をしていて、内気な感じの子。私、彼のが好きだった、あなたに打ち明けたんだよね。バイトの帰りに。

風子 そうだっけ？

薫 そうよ。そしたら、あら、素敵、私も応援するわ、うまくいくといいわね。あなた、はっきりそう言ったのよ。

風子 そう？

薫 そうよ。そう言っておきながら、いつの間にか、私を出し抜いて山本君とデートしたんだよね。

月子 ええー！ 大胆！

薫 そうでしょう？ ねっ、そうでしょう。(月子に訴える) 考えられない行動よね。

風子 そんなことあったかしら。記憶にございませんわ。きっとたいしてい

薫 い男でもなかったんじゃないの。

薫 男の善し悪しの問題じゃないのよ。あなたの人格、いえ、品格の問題なのよ。友達を裏切ったのよ。

風子 どちらにしても記憶にないくらいだから、すぐに別れたんだと思うわ。いいじゃない。どうだった。

薫 よくないわよ。あんぱん、袋に詰めながら、告白しようと思ってたのよ、私。山本君と二人であんぱんの袋詰め作業という、またとないチャンス到来で、いつ言おうか、いつ言おうか、って悩んで。あと三つ、あんぱんを袋に入れたら言おう、決心するけど言えなくて、次ぎの一行を入れ終わったら今度こそ言おう、そんな緊張と興奮の狭間のなかで、山本君が言ったのよ。「ぼく、風子さんと明日デートするんだ」。私のシヨック、分かる？ その時の山本君の嬉しそうな顔、(前髪のあたりを手でひらひらさせながら) 天然パーマの前髪がふわふわしてたのよね。

風子 山本君、山本君って言われても覚えてないわよ。山本君の天然パーマが何よ。それがどうしたのよ。

薫 問題は天然パーマじゃないでしょう。私の傷ついた心でしょうが。

月子 まあーまあー、お二人とも、四十年以上も前のことだし、青春時代の

ほろ苦い思い出、ということ。

薫 (天を見上げるように)こんなはずじゃなかった。私、ずっと独身なのよ。
月子 私だって、ずっと独身ですけど。

薫 風子さんが邪魔しなかったら、今頃違った人生だったかもしれない。
山本君と付き合って、プロポーズされて、ハワイあたりで結婚式挙げて、子供が二、三人出来て、田園調布あたりにバーンと豪邸を建てて、そろそろ孫だって出来ている頃だわ。山本君は庭の芝生で孫とサッカーなんかしてて、私は木陰で優雅にミステリーなんか読んでるの。風子さんの裏切りがなければ、傷ついた心のままこの歳まで独身という人生には、なっていないかもしれない。

風子 まさか。変よ、それ。(月子に向かって)大丈夫かしら、様子がおかしくない？

薫 私、若い頃から、なぜか男性に積極的になれなくて。友に裏切られたということが、トラウマになっていたのね。今、はつきりと見えて来た。友達が好きだって言ってる男を横取りするのって、罪が重いわよねー。月子さん、何か言つてよ。

月子 ええー、私が？ そんな恐ろしいこと……。

風子 とにかく、覚えてないけど、その山本君はあなたじゃなくて、あたしのが好きだった訳でしょう。人の心まで支配出来ないわよ。

月子 はい、そのあたりでストップ。では、判決です。時効ということ、二人とも忘れましょう。

薫 時効って廃止されたんじゃないかしら。

月子 これ、殺人事件じゃないですから。つい、数日前、いえ、数時間前のこと、ケロツと忘れてたりしてるのに、そんな昔のこと思い出すなんて、歳をとるって、哀しいものですね。

薫 ほんと不思議ね。胸の奥深くで眠っている悲しみは消えないのね。

風子 薫さん、だったら言わせてもらいますけど、あなたって、すごく我が侷なのよね。この家の部屋割り決めた時だって、二階の一番日当りのいい角部屋、あなたの部屋になったでしょう。

薫 ちよつと、あれは、あみだくじで決めたんでしょう。

風子 あのアみだくじ、何か秘密があったんじゃないかしら。あなた、最初っからこの端の部屋がいい！って駄々こねてたもの。

薫 それは言いがかりよ。秘密なんてない、公正なものよ。

風子 さあー、どうかしら？

月子、二人を制するように立ち上がる。

月子

もう、いい加減にしてください。二人ともあんなに楽しそうに笑っていたのに、どうしたんですか？　なんで楽しい飲み会がこういうことになるわけ？　二人とも、自分の主張ばかり。だったら、私だって言いたいことがありますよ。（月子、突然、窓の両端にまとめられていたカーテンを広げる。片方は白地に水玉模様、片方はロココ調のゴージャスな模様のカーテンが現れて、ひとつの窓に二種類のカーテンが垂れ下がる）このカーテン、何ですか、これ？　同じ部屋で、しかも同じ窓に、この趣味の違うカーテン。こちらは（水玉模様をさして）薫さんの好み、これは（ロココ調模様をさして）風子さんがどうしても譲らなかつたもの。仕方なく、こういう結果で落ち着かせたけど、これ、変でしょう。この部屋、カーテン閉めると、ほんと居心地悪い部屋ですよね。

薫

じゃあ、あなたはどっちが好みなのよ。

月子

どっちも私の好みじゃありません。このうえ、私の好みを強行すれば、

薫

どうなると思います？　この絵も、このソファも、みんなバラバラ。このバラバラ感、まさに私たちのバラバラ、そのものみたくですよ。そうかしら？　それぞれの要求を満足させるには、ある程度目を瞑る必要があるわよ。

月子

インテリアの不調和は目を瞑るとして、二人とも取り決めたこと、守ってないですよ。

風子

あら、何かしら？

月子

風子さん、冷蔵庫に貼ってあるカレンダー見に行ってください。

風子

なーに？　スケジュールの確認？

風子、キッチンに消える。

風子

（キッチンから）はい。どうぞ。

月子

先週の火曜日、そこに何かマーク見えますよね。

風子

あらあら、先週の火曜日はあたしのゴミ出しの日だったみたい。（キッチンからもどって）ごめんなさい。ほら、あたし、フランス旅行の準備で忙しかったからつい。だれか代わりに出してくれたんだ。

月子 私が出しておきました。風子さん、ゴミ出し忘れるの、多いですよね。何とか避けようとしてませんか？

風子 まさか、うっかりというか、この頃、物忘れがひどくなっちゃって。

月子 これで、旅行中の分も含めて風子さんのゴミ出し、来週から続きますからね、ちゃんとやってくださいね。

風子 お言葉ですけど、旅行中のゴミ出しまでローテーションで組まれるって変じゃない？ 留守の間、あたし、ゴミを産み出してないのよ。

薫 だめだめ。そういうこと言い出すと、これは私のゴミじゃないとか、誰かがたくさんゴミを出したとか、紛争の元になるんだから。多くても少なくとも、平等に責任を負う、これが、このシェアハウスの精神よ、ねえ、月子さん。

月子 薫さんにも言いたいことがあります。

薫 えっ？ 私？

月子 私の洗濯籠に自分の洗濯物を紛れ込ませるの、やめてもらえませんか。ばさっと籠から移して洗濯して干してみると、身に覚えのないブラジャーやTシャツが入ってるんですよ。仕方ないから干しておく、乾いた頃、いつの間にか消えているんですよ。あれって、薫さんの仕業

ですよ。

薫 でも、一応気を使ってパンツとか、ものすごく汗をかいたTシャツとかは外しているのよ。

風子 ひどーい。

月子、カップボードの引き出しを開けて、紙切れを取り出す。

月子 ここに『シェアハウスにおける私たちの取り決め』って、三人でサインしたものがあります。

月子、取り決めに読み上げる。

月子 ひとつ、各個室は常に清潔に保つておくこと。ひとつ、共同スペースは週三回の掃除を常とし、各自一週間に一度は負担すること。ひとつ、使った食器類等は各自が片付けること。片付けるとは、洗って拭いて食器棚、及び、あるべき場所に収納するまでをさすものである。ひとつ、ゴミ出しは、各自、ローテーションを守ること。ひとつ、各自、身の

回りのことは人に甘えることなく独立心をもって対処すること。ひとつ、家をシェアするということは、単にスペースをシェアすることにとどまらず、お互いの時間や生活そのものをシェアすることにもなる。プライベートを尊重しつつ、お互いを思いやり助け合うこと。他人同士の集まりではあるが、私たちは新しい家族として、ここにスタートする。平成二十七年五月二十日。(月子、紙切れを高く掲げる)

風子

そうよ、そうよ。初心を忘れちゃあだめよね。三年前、三人でここで暮らそうと決めたのは、寂しい独身女二人と、可哀想な未亡人一人が、それぞれ傷を抱えて、とても一人じゃあ、寂し過ぎるからって、支え合って暮らそうって決めたのよね。

月子

私、独身だけど、寂しい独身女ってジャンルに入れてほしくないわ。

薫

私も寂しい独身女っていわれたくないわ。ここでの暮らしを決めたのは、風子さんが故郷の東松山に帰って再出発したいって言って、私も月子さんも一緒に部屋探しを手伝ってる時に、この家見つけたんじゃない。庭のあの枇杷の木も素敵で、リビングの広いこんな家、いくら東京より家賃が安いからといって、とても一人じゃ借りられないからってというのが、一番の理由よ。

月子

そうですね。都心へのアクセスも悪くないし、都幾川の土手を歩きながら、ここで三人で暮らすのもいいかなって決めたんですよね。

風子

それじゃあ、傷をおって可愛そうなのはあたしだけってことね。

薫

そんなに可哀想な未亡人だったかしら？

月子

そうですね。とてもあわれな未亡人には見えないわ。明るい未亡人って感じですけど。

薫

こんな立ち直りの早い未亡人って初めて見たわよね。ご主人の平太さんにガンが見つかったから半年足らずであっという間に亡くなって、おしどり夫婦だったから、大丈夫かしら、立ち直れるかしらって、月子さんともずいぶん心配したのよ。

月子

そうですね、薫さんなんか、後追い自殺でもしたらどうしようなんて、本気で心配してたんですよ。それにしても女は強し、ですね。歳をとって妻を亡くした男って、立ち直れないって言うじゃないですか。

薫

そうそう、男はね。残されると惨めよね。

月子

そこへいくと、女の場合、妙に若返ったり、やたら元気になる未亡人が、なんと多いことかしら。

薫

そうそう、そういう人、いるのよね。わりあい近くにも。(風子を見る)

風子

それって、あたしのこと？

薫

風子さんなんて、三カ月もかからなかったわよね。とにかく、平太さんのものは何もかも、みーんな処分したんでしょう。ほんと、早かったわよ。平太さんが、学生の頃から集めていたっていうロックやポップスのLPレコードも業者呼んで買い取ってもらって、住んでいたマンションも手放すって聞いた時は、とにかく忘れて再出発したいんだろうな、とは思ったけど、早い！　っていう感想だったわね。

月子

でも、それでいいと思うわ。生きている者は先に進まなくちゃ。風子さんの強さ、素晴らしいですよ。

薫

素晴らしいは。いささか強引ね。それにしても、平太さんの愛用のギター、生前、「ヘタの横好きなんです」なんて言って、若い頃やってたギターを五十近く買って、また習い始めていたじゃない、そのギターまで、すぐに処分したのには驚きだったわ。でも、立ち直りが早いってことは、いいことよ。前向きよね。

黙って聞いていた風子、突然ワァーッと大声をあげる。

薫

何？

月子

どうしたんですか。

風子

ひどいわ、ひどいわよ。わたし、三十二歳で結婚して平太とは三十年間ずっと、離れることなく暮らしていたのよ。

薫

別居してるって話は聞かなかったわね。

風子

子供には恵まれなかったけど楽しかったわ。バカみたいなことで喧嘩して泣いたりしたこともあったけど、一緒にご飯食べて、ずっと近くにいたのよ。

薫

そんなこと、のろけられても。ねえー。(月子に同意を求める。月子、曖昧な表情で応える)

風子

それがほとんど突然みたいになくなってしまったのよ。寂しいとかそんな生易しいものじゃないのよ。ずっとそばにいた人が居なくなるって、ほんとに恐いんだから。そこにギターが立てかけてあって、夜中にふと目を覚ますと、平太が、そこで、ギターの練習しているのよ。ああー、うまくいかないなーって、何度も何度も同じところ弾いているの。夜中に何やってんの？って、声をかけそうになって、ああー、私、一人になったんだって気がつくの。洗面所に行ったら、体重計に乗って

いる平太がいるの。だめだー、また、五百グラム増えちゃったよ、ビールの飲み過ぎだなんて。あんなに痩せていたのに、あんなにガリガリになってしまったのに、体重計に乗ってる平太は、体重気にしてるのよね。引き出し開けたら、平太の靴下、ものすごい量の靴下が出て来るのよ。履きもしなかった、やたら派手な靴下が山のように。靴下集めるのが趣味だったのよ。買って来た靴下を丁寧にまるめて引き出しに仕舞っている平太がそこにいるの。また、靴下買って来たのって私、文句言ってるの。気がついたら、ぼろっと一人でしゃべっているのよ。風呂場に行ったら、シャンプーが少なくなってるよって、後ろから声が聞こえてきそうだし、電話の受話器取ったら、ごめん、今日飲んで帰るから、晩ご飯いらなくて声が聞こえてきそうで、そんなはずないこと分かっている、受話器を耳にあてたら平太の声が聞こえるかもしれないって、受話器取って、じっとしてるの。そしたら、叫びたくなるのよ。電話の向こうに向かって叫んでいるのよ。バカー、平太のバカヤロウ。約束が違うじゃないのー、なんで、あたしを一人にするのよー、て。毎日使っていた食器も、本棚の本も、何もかも平太がいるのよ。もう、とても先なんて見えなかった。どこにも行けなかった。

平太のものは全部、見えないところに隠さないと、私、どこにも行けなかったのよ。ずっと平太に守られて、ただただ、楽しく毎日過ごして、気がついたら、取り残されて、どうすればいいって言うのよ。立ち直り早過ぎるって何よ。平太のギター撫でながら、毎日泣き暮らせば納得するって言うの！あなたたちに分かるわけないわよ！

月子と薫、風子の様子に、ややショックを受けたようで沈黙していたが、薫、立ち上がって声をあげる。

薫

それがどないしたって言うの。(関西弁になっている) 夫に守られて、三十年間も楽しく毎日過ごしてきたんじゃないの。いいじゃない。充分じゃない。一人になったからって何やの！ひとりぼっちになって寂しいやなんて、なに威張ってるのよ。私なんか、ずっと一人なんやから。私かて、月子さんかて、毎日一緒にご飯食べる人なんていてへんかった、そんな幸せなこと、一度だっとなかったんやから。

月子

薫さん、興奮すると大阪弁、きつくなるんですね。

薫

アホかいな、これは大阪弁やない、京都弁や。一緒にせんといて。

月子 すみません。

風子 (遠慮がちに) 最初っから、ずっと一人だったら耐えられても、急にそうなたら、耐えられないことだってあるんだから。

月子 そうですよ。人の寂しさも、人の幸せも、自分のものにはならないですもんね。

三人、それぞれの想いに浸っている中、プレスリーの「ラブ・ミー・テンダー」が流れる。(暗転)

3

昼下がり。月子はテーブルでパソコンに向かっている。薫は出かける準備でスカーフを巻いてみたり、帽子を被ってみたりと落ち着かない様子だ。

薫 ねえ、このスカーフと帽子じゃあ合わないかしら？

月子 (パソコンに向かったまま) いいんじゃないかしら。とっってもお似合い

ですよ。

薫 見もしないで、なんで分かるのよ。

月子 分かりますよ、見なくても。薫さん、趣味がいいから。それに何を着てもお似合いよ。(パソコンの画面を見たまま、キーを連打している)

薫 (あたりや窓の外を見渡して) ねえ、風子さんはお出かけ？ 今朝から見ないけど。

月子 ええー、誰かと、確か『エル・グレコ展』って言ってたかしら、上野の美術館に行ってからランチですって。

薫 へえー、『エル・グレコ』ねえ。

月子 薫さんのお出かけは？ お買い物？

薫 ええー、まあー、私も偶然なんだけど、上野の美術館で『ラファエロ展』を観ようと思って。

月子 あら、偶然ですね。でも、二人が宗教画に興味があったとは、初耳ね。宗教画に興味があるわけじゃないけど、綺麗なものは観る価値ありよ。

薫 お友だちに誘われたのよ。たぶん、夕食は外で済ませてくることになるわ。

月子 あら、そうなんですか。楽しんで来てください。ところで、(パソコン

から手を離して）この間の夜、ちょっと飲み過ぎだったかもですね。私たち、風子さんに立ち直り早かったって、言い過ぎたみたいですね。まあ、彼女の言うとおり、急に連れ合いに先立たれたんだから、寂しい思いをしたのは確かだと思うけど、違う一面もあるかもよ。

月子 ええー？ 違う一面って？

薫 だって、風子さん、常日頃から私に言っていたのよ。平太は私のこと、お手伝いさんくらいにしか思っていないって。洗濯、掃除、何ひとつ手伝ってくれたこともない、どこか、上から目線で見ているって。それで、平太さんが亡くなって三カ月後には、私は三十年前の本来の自分を取り戻すの、なんて言っていたんだから。

月子 ええーっ、そうだったんですか？ そんなに自分を抑えていたようには見えなかったけどな。

薫 まあー、本当の気持ちなんて、自分でもちゃんと認識出来ないものよ。まして、外からは分からないわね。

月子 確かに、本当のところって分からないですね。実は薫さんに言おうかどうか迷っていたんですけど……。でも、どうしようかな。

薫 何よ、言いなさいよ。そういう思わせぶりな態度、好きじゃないわ。

この枇杷の家に秘密はなしよ。

月子 枇杷の家って、いつからそんな名前が付いたんですか？

薫 いつだったか風子さんが、ここを枇杷の家と呼ぼうって。言っていなかったっけ？

月子 聞いてません。枇杷の家って、なんかそのまんまですね。

薫 まあね。それより、何なのよ、言いかけたこと。

月子、大きな仕事鞆から、額縁入りの絵を取り出して、高く掲げて薫に見せる。壁の絵とほぼ同じ、丸の数が一つ多いだけ。

薫 お、同じ……。ほぼほぼ……。

月子 （壁の絵を指して）あの絵って、パリで二千ユーロも払って買って来たって言っていましたよね。

薫 そうよ、本人いわく美少年の絵描きの卵から買ったって。自分は絵の目利きがあるみたいに自慢してたわよ。これ、どうしたの？

月子 上野公園で売っていました。昨日、上野で打ち合わせがあって、時間が空いたのでぶらぶら歩いてたら見つけてしまって。美少年じゃなく

て、ポロポロのおじいさんが、二千ユーロじゃなくて二千円で売って
ました。つい、無視出来なくて買ってきました。

薫 上野でねえ。信じられない！（薫少し考え込んでから）いや、信じら
れる。やっぱり、風子さんらしいわね。あの人、そういうところあるのよ。
（可笑しそうに）あの高級ワインだって、本当にフランスから買ってき
たのかどうか、怪しいわね。丸広の地下にいくらでも売ってるもの。

月子 ええーっ、そうなんですか？（とんでもないことに気がついた様子で）
もしかして、パリ旅行っていうのも嘘？

薫 嘘という表現が適切かどうか……（きっぱりと）風子さんが行ったっ
て言ってるんだから行ったのよ。

月子 そうですね、（立ち上がって断言するように）風子さんは、パリに行って、
私たちはパリ土産のワインで酔っぱらったんですね。（絵を持ち上げて）
これはなかったことに。

薫 ええ、それはなかったことにしましょう。風子さんは、ポンヌフの橋
の袂で美少年からあの絵を買って来たのよね。だまされちゃってバカ
ね。（時計を見て慌てて）あら、こんな時間、じゃあ、私出かけるわね。
月子 いったらっしゃい。帰りは遅くなるんですか？

薫 どうかしら。もしかして、外泊するかも。

月子 あら、そうなんですか？

薫 冗談よ。

薫、うきうきと出かける。

月子 （首を傾げながら）冗談って、何が？ 時々、意味不明なのよね。

月子のパソコンを打つ音が続いている。窓の光が夕刻を表してい
る。風子、玄関の方から登場。

風子 ただいまー。

月子 お帰りなさい。

風子 月子さん、いつもお仕事ご苦労さま。

月子 ごめんなさい、テーブル占領しちゃってる。今、片付けて部屋で仕事
するから。

風子 気にしないで、続けて。あたし、月子さんがそこで仕事してるの見て

るの好きよ。

月子 ありがとう。何かこのほうが、資料とか、広げられるから、つつい。

風子 忙しそうね。夕食、どうするの？ よかったら、ヤキトリ買ってきたから、（紙袋を持ち上げて）一緒にどう？

月子 嬉しい。でも、気にしなくてよかったのに。食事に関しては自分のことは自分でっていうのが、この枇杷の家の基本なんですから。

風子 あら、枇杷の家、すっかり定着したみたいね。

月子 定着というか、まあ、強引に決まっていたみたいですね。でも、ヤキトリはいただきます。

風子 そうよ、忙しい時は甘えてちょうだい。それも楽しいんだから。せっかく同じ家で暮らしているのに、寂しいでしょう、一人の食卓は。

風子、食卓の用意をして、買ってきたヤキトリを皿に移し替えたりしている。やはり、歌を歌っている。「追いかけて」と、どうやら、ザ・ピーナツの『恋のフーガ』のようだ。

月子 あら、その歌、懐かしいわ。風子さん、何かいいことでもあったんで

すか？ ご機嫌ですね。

風子 別に何も無いわよ。（と、言いながらうれしそうな表情）

月子 そうだ、冷蔵庫に京都の取材先から届いた千枚漬けがあるんだけど、それも出してもらっていいかしら？

風子 オーケー。（キッチンから）やっぱり、漬け物は京都ね。先月は静岡から桜えびが贈られて来てたじゃない。食材の取材って、いい事づくめね。

しゃべりながら、風子、千枚漬けをテーブルに運ぶ。月子、パソコンの前で、オーバーな動作。

月子 上がりー！ 送信！ 締め切りギリギリ。今日の仕事、おしまい。

風子 お疲れさま。

月子、パソコンや資料を片付けて、テーブルを整える。

月子 ビール飲みたいなー。

風子 私も、今、それ言おうと思ってたんです。日本酒もあるのよ。

月子 宴会しましょうか？
風子 しよう、しよう。

ビールや日本酒をテーブルに並べて、グラスにビールを注ぐ。二人、乾杯をして飲み干す。

月子 ああー、うまいー！（飲み切った後、満足げな声を発する）やっぱり仕事の後の一杯はうまいわ。（ヤキトリを手にながめて）それにしても、豚肉なのにヤキトリっておかしいですね。

風子 そうかしら、ヤキトリは、豚のカシラ肉で味噌ダレって、これ関東の常識よ。

月子 風子さん、それ、関東の常識じゃなくて、ここ東松山だけの常識みたいですよ。

風子 あらー、そうだったかしら？

月子 薫さんにも取っついてあげましょうか？

風子 いらなと思うわよ。あの人、いちいちうるさいでしょう。ヤキトリはお店で焼きたてを食べなくちゃだめだ、持ち帰りなんてとんでもな

い、なんて通ぶっちゃって。京都の漬物物だけで十分だと思うわよ。その、何かにつけてあれこれうるさい京都人は、今日もお出かけね。食事はお友だちと済ませるって、遅くなるみたいなこと言っていましたよ。もしかして、外泊するかもって。でも、冗談だって。

風子 あの人、この頃少し変だと思わない？

月子 うーん、確かに。気になることがなきにしもあらず。

風子 そうでしょう。どうもあやしいのよ。

月子 この間も、薫さんらしくないっていうか。

風子 そうなのよ。ひらひらのワンピースなんか着ちゃって。

月子 薫さん、ひらひらのワンピース着て、何か変な行動とってたんですか？

少女帰りとか？

風子 少女帰り？

月子 よくあるパターンらしいですよ。進行すると自分の年齢が認識出来ない、なんて症状も出るみたいです。

風子 自分の年齢が認識出来ないんじゃないじゃなくて、自分の歳を忘れたいのよね。進行の具合にもよるけど。

月子 もちろん、まだ病院に行くほどでもないでしょうけど。

風子 まあー、知的な月子さんのお言葉とも思えないわ。病院だなんて、そんなバカな。

月子 でも、対応は早いに越したことはないですよ。私たちにとって、いえ、誰にだっていつでも、すぐそこにある危機ですもの。まわりの気がついた人が、何か行動を起こしたほうがいいかもしれないわ。

風子 あら、危機だなんて、うふふふ。そうね、でも、あまりまわりで騒ぐと、せっかく育まれた幸せの芽が枯れちゃうかもよ。それはそれで、喜ぶべきことなのよ。

月子 (首をひねりながら) なんだか、話が噛み合っていないような。

風子 そうかしら。薫さんに、だれかお付き合い始めた人がいるんじゃないかって話じゃないの？

月子 (異常に驚く) ええー！ そうなんですか？ そのお付き合いって、いわゆる若者がいう「付き合ってる」と言う関係性を表しています？

風子 いわゆる若者が言う付き合ってる、という関係性については分からないけど、ちょっといい感じになりそうな親しいお友だちレベルだと思うわよ。

月子 なるほど、そうか、それで納得かも。大事なこと忘れてたり、ぼーっと

してたり、それって、神経がそっち方面に行ってたんですね。誰ですか？
相手の方はどんな人？

風子 知らない。直接聞いたわけじゃないもの。長い付き合いの、あたしのカンよ。あなた、それとなく聞いてみてよ。日本酒、もう少し、いく？

月子、オーバーにうなずく。風子、立ち上がって、キッチンから一升瓶抱えて戻ってくる。

月子 いいなー、なんでそんなラッキーなことが起るの？ 私なんて、もう、何十年も彼氏いない状態で、五十半ばも過ぎて、更年期まっただ中ですよ。女盛りの美しい肉体を使ってもないまま、今にいたっていますよ。

風子 最後の恋愛って幾つの時だったの？

月子 ああー、もう、思い出せないくらい昔だわ。たしか、恋愛らしき経験があったのは、二十代の終わり頃かな。

風子 まあーっ。ほんと？ それ。

月子 ほんとうですよ。世の中にはね、びっくりするくらい何にも起らないで、

昨日と今日が何にも変わらないまま、老人になる人だっているんですよ。風子さんみたいに恋多き人には想像もつかないでしょうけど。

風子 確かに、あたしは恋多き女かも。(風子、うっとりとした表情)

中学の頃から、友だちに恋の話を聞かされたり、結婚式に参列する度に、次はきっと私の番だわって根拠のない自信で、電車の順番待つみたい待ち待っていたんですけど、目の前に電車が停まっても、ドアが開かなかつたり、横の誰かがすーって乗り込んで、鼻の先でドアがピシヤリ！そんな感じで気がついたら更年期。

風子 まあー、確かに悲しいわね。でも、そんなに何もなくて、よく文章書いたり出来るものね。

月子 私、恋愛小説書いてるわけじゃないですから。日本中の食材の産地に行つて取材して、野菜や魚のこと書くだけですもの。蛍ほたるい魚や、桜えびの生態と、恋愛経験なんて関係ないでしょう。でも、烏賊や海老でさえ、子孫残すために命がけで相手探すんですよ。私、いったい今まで何やってたんだろう。もう、何をすることも遅過ぎるわ。

月子、突然声をあげて泣き始める。

風子 あら、どうしちゃたの？ あなた泣き上戸だった？

月子 違うんです。この頃、涙もろくなってしまつて。時々感情の抑えが効かなくなるんです。この前も江ノ島に『しらす』の取材に行ったついでに水族館に寄つて、大好きなクラゲを見てたんですけど……。

風子 (同情を込めて) そう？ クラゲが好きだったの。

月子 説明文読んでたら、クラゲって、死ぬと、体は水に溶けて泡になって消えてしまふって書いてあったんです。そしたら、クラゲって人魚姫じゃないかって思つて。

風子 なんでクラゲが人魚姫になるの？

月子 人魚姫も、王子様に裏切られて泡になって海に消えるじゃないですか。跡形もなく消える人魚姫やクラゲのことを想うと、何だか切なくなつて、クラゲ見ながら水族館で泣けてしまつて。

風子 泡になって消えるなんて素敵じゃない。あたしも最期はそんなふうに消えたいわ。でも、中年女が薄暗い水族館でクラゲ見ながら泣いている姿は、いささか不気味ね。

月子 (ちよつときよつとして風子を見ながら) 今の言い方、薫さんが乗り移つ

たみたいでした。

風子 あら、そうだった？ でも、クラゲ見て涙流すのって、五歳の子どもだったら可愛いかもしれないけどねー。

月子 いいんです。きっと更年期障害のひとつだと思います。エストロゲンという女性ホルモンが減ってきている証拠なんです。病気じゃないし、更年期障害で死ぬわけでもないですから。

風子 いいえ、更年期障害って、バカにできないのよ。死に至ることもあるんだから。

月子 ええー？ そうなんですか？

風子 あたしも聞いた話なんだけど、ある人がね、更年期の時、部屋で好きなジャンス・ジョプリンを聞きながら掃除機かけていて、ふと窓の外の青い空と真っ白な雲が目に入って、それ見ると理由もなく、ああー、もういいや、死のうって、掃除機のスイッチ切るのも忘れて、十階のマンションの窓から飛び降りたくなって、ふらふらってベランダに向かったんですって。

月子 ええー！ まさか、飛び降りたんですか？

風子 そこに、ちょうど旦那さんが帰ってきて、我に返ったらしいわ。

月子 なんだかりアルですね。それって、もしかして風子さんの経験？

風子 まさか、あたしは何があっても自分から死んだりしないわ。寿命がくるまでとことん生きてやるわよ。未来にはどんな素敵なことが待ってるかもしれないのよ。もったいないわよ。

月子 でも、未来にはものすごく不幸な出来事が待ってるかもしれないですよね。

風子 そう言う人いるのよね。悪いことばかり想像して、まだ何も起っていないのに、暗くなるタイプの人。

月子 風子さんほど樂觀的にはどうも。どちらにしても誰かに出逢うなら、二十年、いえ、せめて十年でも若い時に出逢いたかったわ。

風子 若い時は若い時でいいけど、今は今よ。いつだって、今が一番なんだから。

そこに玄関から薫の声が聞こえる。

薫 ただいまー。

月子 あら、薫さん帰ってきたみたい。お泊まりじゃなかったみたいですね。

薫、けっこうハイテンションで登場。

薫 あらー、お二人お揃いで。

風子 お帰りなさい。なんだ、遅くなるかと思ってた。食事は？ よかったら京都の千枚漬けと日本酒はいかが？

薫 いいわね。夕食は一応、済ませたけど、お仲間に入れていただこうかしら。

風子 そうこなくっちゃ。どうぞ、今、あなたの噂してたのよ。

薫 あらー、何よ。私の噂って。

薫、テーブルにつく。月子が薫のグラスを用意し、風子が薫のグラスに日本酒を注ぐ。三人、あらためて乾杯。

風子 薫さん、ちょっと立って。(薫を立たせる) ほら、こんなにおしゃれした薫さん、珍しいわよね。

月子 ええ、確かに。おしゃれして、どなたとエル・グレコ展観て来たんですか？

すか？

薫 あら、私が観たのはラファエロよ。

月子 あっ、そうでしたっけ。エル・グレコは風子さんでしたっけ。

風子 あら、あなた、今日、上野の美術館に行ったの？

薫 ええー、あなたもですって？ 偶然ね。

風子 なんだか妙な偶然ね。でも、時間がずれていてよかった。

月子 あら、風子さん、薫さんと会うと都合悪かったんですか？ なんだか、

二人とも変ね。どなたと美術館巡りだったの？

薫 私は、お友だちよ。

風子 あたしも、お友だちよ。

月子 まあー、二人のお友だちって、男性ね。

風子 薫さん、どこで知り合ったどんな男性なの？

薫 あなたこそ、エル・グレコの君はどんな男性なの？

あたしの場合、男性とかそんなじゃないの。

月子 じゃあ、女性？

風子 いえ、男性だけ。

月子 どこで知り合ったんですか？

風子 ほら、一年ほど前、市のカルチャーセンターで「万葉集に親しむ会」っていうのに参加したことあったでしょう。そこでちょっと親しくなつて、まあ、身の上話なんか聞いてもらったり、散歩したりして、気が合うっていうのかしら。

月子 素敵じゃないですか。ねえ、薫さん。

薫 あなたが万葉集に興味持つって、なんだかピンとこないけど。

風子 あら、そう？

月子 何か、風子さんの未来が輝いてきたみたいですね。

風子 未来なんてそんな。(照れてその変を歩き回るが、立ち止まって) 未来ねえー。

月子 ところで、薫さんのお友だちは？ どこで知り合ったんですか？

薫 一年前から月一回の割で市立図書館主催の「ミステリーを読む会」に参加してたじゃない、そこで知り合ったお仲間なの。最初隣に座って、話が弾んだりしてね。それで、会のあった日の帰りに、お茶したりしているうちに絵画鑑賞という趣味も同じことが分かって、時々、美術館にね。

風子 ええー！ あなたに絵画鑑賞の趣味があったなんて、初めて聞いたわ。

薫 あら、そうだったかしら？ で、今回、ラファエロ展に行きましようか、てことになって。

月子 二人ともカルチャーが縁だったんですね。私も、何か始めてみようかしら。

薫 そうよ、カルチャー教室のメニューは豊富よ。さて、私、着替えてくるわね。

薫、二階に消える。

月子 風子さん、その万葉集で知り合った方って、どんな方なんですか？ 万葉集なんて渋いですよね。

風子 でも、本人は全然渋い感じじゃないのよ。どちらかと言えばモダンなおじさまかな。帽子なんかもチロルハットをちょこつと軽くのせちゃつて。すらりと背も高いから、姿はいいわね。帽子を取ると、(頭のトップを撫でながら) この辺りが涼しげではあるけど、それもまたチャームングと言えなくもないかしら。

月子 あら、素敵ね。お歳は？

風子 六十七歳。

風子さんより四つ年上か、いい感じじゃないですか。

風子 いえね、私、六十歳ってことになってるから、七つ違いつてことになるかしら。でも、それでも、もつとお若いと思つてました、なんて言われたのよ。会つた時は、必ずどこか褒めてくださるの。今日のお帽子は素敵ですね、とか、今日のスカーフは、その色がとてもお似合いですね、なんてね。それにね、彼は、万葉集の知識がすごい。お話してるだけでとっても勉強になるわ。ユーモアのセンスもあつて、何ていうのかしら、情熱的な眼差しで相手を真つ直ぐ見て、人の心をぐつと掴んで離さないような会話の出来る人ね。あなただけです、こんなに大人の会話が楽しめる女性は、なんて言つてもらつたりして。

月子 (独り言で) 言い換えれば口がうまい、とも言える？

風子 どこか男の色気を感じるの。やっぱり、女も男もいくつになつても、色気つてものが必要よね。五十代には五十代の、六十代には六十代の色気つてありだと思つわ。

月子 そうね、風子さんは、いくつになつても、充分色っぽいと思いますよ。その方のお名前、聞いてもいいかしら？

風子 いいわよ。銀次郎さんっていうの。銀ちゃん、て呼んでるけど。と、まあ、そんな人。そのうち、あなたにも紹介するわ。さて、私はお風呂をいただくわ。色気に磨きをかけなくちゃ。

風子、洗面所の方に消える。入れ替わりに薫、パジャマを手に二階から登場。

薫 あら、風子さんは？

月子 お風呂、風子さんが使つてますよ。

薫 そう、じゃあ、待つてよう。

月子 お茶でも入れましようか？

薫 あつ、私がやるわ。

月子と薫、テーブルを片付け、お茶の用意をしながら。

月子 薫さんも、風子さんも、そんな素敵なお出合いがあつたなんてね。どうして私つてそういうの無縁なのかな？ ねえ、私つて色気つてないか

しら？

薫、月子の質問にむせる。

月子 ええー？ そんなリアクションしますか。

薫 月子さんの色気ねえ。あるとかないとか、そういう範疇じゃなくて、色気を越えた、長く生きてきた人間的魅力っていいばいいかな。

月子 それって、色気なし、ってことですね。

薫 そうね、一般的には色っぽい女の対極に存在していると言えるかもね。ただ、どこに色気を感じるかは、人それぞれだしね。びっくりするような変態嗜好の人もいるから。

月子 ええーっ！（薫の意見にかなり引いている）

薫 例えばの話よ。

月子 ところで、薫さん、そのミステリーを読む会で知り合った方って、どんな方？ ミステリー好きな人って暗そうな気もするけど。

薫 そんなことないわ。謎を捜査で解くというより、謎を推理で究明するというのが、彼の好みなんだけど、その点、私たちは意見が合うのよね。

あなただけです、こんなにミステリーの好みがピッタリ合う人。この歳になって出会えて、ラッキーだったなー、なんて言われたのね。

月子 （独り言で）『あなただけです』同じフレーズ、たった今聞いたような気がするけど、錯覚かしら。（気を取り直し薫に向かって）英国の探偵小説に出てくるようなロマンスグレイのおじさま？

薫 ロマンスグレイというより（頭のトップを撫でながら）この辺りが涼しげではあるけど、それもまたチャーミングよ。どちらかと言えばモダンなおじさまかな。帽子なんかも中折れハットをちょこっと軽くのせちゃって。お腹なんかもまったく出てなくて、すらりと背も高いの、初めて会った時、かっこいいって思ったもの。

月子 （薫に背を向けて）ビジュアル的に、ついさっき想像した人物像に似ているような。中折れハットとチロルハットの違いだけのような気がするけど、（頭を振りながら）そんなバカなはずない。私の想像力が貧困なだけだわ。

薫 歳は六十七歳。もしかしたら、四、五歳サバ読んでるかもしれないけど、そこはそれ、人間の性さがとしておおらかに受け止めなくちゃね。

月子 （眩くように）歳も同じだ。薫さんも、歳サバ読んでるんですか？

薫

そんなことしないわよ。風子さんじゃないんだから。でも、もつとずつとお若いと思っていました、なんて言われたのよ。それにね、会った時は、必ずどこか褒めてくれるの。今日のお帽子は素敵ですね、とか、今日のセーターの色、とてもお似合いですね、なんてね。それにね、彼は、ミステリーの知識がすごい。ハードボイルドからファンタジーミステリーまで、そりゃあ幅広い知識よ。ミステリーって、そうとう博識がないと読みきれないものなのよ。話してるだけでとっても勉強になるのよ。ユーモアのセンスもあって、何て言ったらいいかな、情熱的な眼差しで相手を真っ直ぐ見て、人の心をぐっと掴んで離さない、そんな会話の出来る人ね。ユーモアのない人ってつまらないじゃない？

64

「とてもお似合いですね…」、「情熱的な眼差し…」、「人の心をぐっと掴んで離さない…」など、薫のセリフを眩くように反芻しながら薫の話聞いていた月子、腰を抜かしたような状態でソファからずり落ちる。

月子

もちろん、ユーモアのない人生なんてつまらないですよ。まさか、

まさか、これって、ユーモア？ 喜劇？ それとも悲劇？

薫

何、意味不明なこと言ってるのよ。

月子

(震えながら) 薫さん、その紳士のお名前、聞いてもいいですか？

薫

そうね、月子さんにだけ言っちゃうわ。銀次郎さんっていうの。銀ちゃんて呼んでるわ。

月子

ぎ 銀ちゃん……。

月子、立ち上がって固まったまま動かない。そこに風子、風呂場から出てきて登場。

風子

お風呂、お先でした。

月子

(風子を見て) ギャーっ、びっくりした！

月子、へなへなと座り込む。

風子

あら、この方、どうしたの？

薫

さあー、酔っぱらったのかしら。

65

プラターズの「オンリー・ユー」が流れて、
(暗転)

舞台の上手(または下手)から、スポットライトが当たって銀次郎登場。ゆっくり歩いて舞台中央で立ち止まる。客席に向かって、帽子を取り優雅に会釈をして去る。

4

昼下がり。中庭には明るい日差しが満ちている。

薫がリビングのソファで新聞を広げている。そこに月子、紙袋を大事そうに抱えて二階から降りて来る。

月子

風子さんはお出かけですよね。

薫

そうみたい。朝から出かけたみたいよ。

月子、ややオーバーに薫に囁く。

月子

(袋から問題の絵を取り出して)これなんですけど、どうしたものかと思っ
て。なかったことにするからって、捨ててしまうのも気が引けて、
薫さん、どなたかこの絵、もらってくれる人いないですか？

薫

いないでしょう、そんなおかしな絵。あなたの仕事関係の人で、こ
ういう趣味の人いないの？

月子

思い当たらないなー。

薫

それか、あなたのお友だちで近々お誕生日の人とかいたら、リボンで
も付けてプレゼントにすれば？

月子

でも、捨てたくても捨てられない物をプレゼントにするのは不誠実で
すよね。リボン付ければOKってものでもないし。ああー、どうしまし
よう。

薫

どうしましょう、と言われてもねえ。そうだ、この絵、知らーん顔
してあれと差し替えておこうか？ 風子さんのことだから、たぶん、
九十九パーセント気が付かないと思うわ。

月子

まさか、そんなこと出来ないですよ。それに、残りの一パーセントは
気が付くってことでしょ。そんなことしたら風子さん傷ついちゃいます

薫
よ。
残りのパーセントは、気が付くんじゃなくて、自分の記憶違いだ
て思うのよ、あの人なら。

薫、楽しそうに絵を取り替え始める。月子、何とか阻止しようと
する。

月子
いやいや、薫さん、ダメですよ。ほんとに冗談で笑えないですって。
まさか、こんな絵があったなんて……。

薫
あら、あなたが買って来たのよ。そんなに気を使うのなら、最初から
無視すればよかったですよ。

月子
だから、それは、最初見つけた時、びっくりして、確かめる必要があ
ると思って買ってしまったんです。
薫
あなたって、変に真面目過ぎるのよね。

薫、付け替えた絵を満足そうにみている。

薫
ほら、月子さんだって、言われなければ気がつかないでしょう。

月子
いやー、やっぱり丸の数が違いますもん。風子さん、気がつくと思
いますよ。だって、とつても気に入って買ったんでしょ？

薫
それはどうかしら。大丈夫よ、心配性ね。私、絶対自信ある。風子さ
んは気がつかない！ この絵は私が預かっておくわね。

薫、外した絵を持って二階に上がっていく。

月子
薫さん、やめてくださいーい。

月子、薫を追いかけようと階段に向かうと固定電話がなる。二階
を気にしながら電話を取る。

月子
はい、枇杷の家です。あら、風子さん。どうしたんですか？ ええー、
特に予定はないですけど。薫さん？ ええー、今日は出かけてないで
すね。代わります？（電話の応対をしながら、二階と絵をしきりに気
にしている様子）そう？ ええー！（大声をあげる）あっ、ごめんな

さい。あまりに急だったものだから。そんな、すぐ近くまで来ているって言われても。紹介はまたの日でもいいんじゃないですか？ そのうちでも。いいえ、会いたくないなんて言っていないです。ただ、ほら、お掃除も行き届いてないし、ちゃんとおもてなし出来る日をあらかじめ決めてからのほうがいいと思って。そりゃあそうかもしれないですけど、いえ、やっぱりダメです。やめてください。もしもし、もしもし……。

月子、受話器を置くと、慌てて部屋を動き回っている。二階に行こうとしたり、戻ってみたり、とバタバタしている。

月子

(独り言) どうしよう、どうしよう。何とかしなくちゃ。銀ちゃんと一緒にと言われても困るんですよ。ダメなんですよ。ああ、それにこの絵、取り替えたままじゃない。絵も何とかしなくちゃ、いや、そうじゃない、絵より薫さんを何とかしなくちゃ。

そこに、薫が二階から降りて来る。

薫

(絵をみながら) やっぱりパツと見、言われないと分からないわね。

月子

(薫をみて) ヒヤーツ！

薫

どうしたの？ そんなに驚くことないじゃない。ちよつとしたジョークよ。そんなに心配なら、後で元に戻しておくわよ。

月子

そんなのんきな話じゃないんです。それどころじゃないんです。そうだ、薫さん、今日はいいい天気ですね。散歩とか行かないんですか？ 行つてらっしゃいよ。

薫

行かないわ。それより、コーヒーでも入れようか。

月子

じゃあ、私、コーヒー入れて、お部屋に持って行ってあげます。自分の部屋が落ち着くでしょう。ここ、ほら、今から掃除しようと思って。

薫

今日のリビングの掃除当番は私だったのよ。私、今朝、ちゃんと掃除したつもりだけど。掃除機かけて、モップで拭いたわよ。いつものとおり。何か不備でもあったかしら。

月子

そうですね。いや、そうじゃなくて、今、さっき、私が汚してしまった気がしたから。

薫、床をぐるりと見渡す。

薫 きれいじゃない。

月子 ほんと、完璧だわ。私ったら、何カン違いしたんだろう。いえね、今ね、私の仕事関係の人が打ち合わせに来るっていうから、ちよつとの間、リビングを使わせてほしいんですね。

薫 いいわよ。最初っからそう言えばいいじゃない。つまり、私がここで、ポーっとコーヒーなんか飲んでちゃ邪魔なんでしょう。

月子 そ、そうなんです。いえ、そうじゃないんです。

薫 いったいどっちなの？ いてもいいの？ いないほうがいいの？

月子 (そわそわと玄関の方を気にしながら、声を絞り出すように) いないほうがいいに決まっています。いえ、そうじゃないんです。邪魔だなんて、そんなことないんですけど、ごめんなさい。仕事の内容によっては、外部に漏れると困る機密事項もあるものですから、担当者が気を使うと思つて。

薫 ああー、そういうこと。そんなこと、遠慮しないで言えばいいのよ。お客さまが来られたら、私がお茶をお出ししてあげる。その後、すーつと消えてあげるわよ。

月子 いえいえ、そんな、お茶出しなんて、薫さんに私の仕事のお手伝いさせるなんて、とても出来ません。

薫 そんな遠慮しないで。暇なんだか使つてちょうだい。

玄関のチャイムが鳴る。

月子 (驚いて) ひえー！

薫 あら、もう来られたみたいね。そんなに興奮しなくても。何か特別な人なの？

月子 薫さん、お願いです、とりあえず部屋に戻っていてもらえます、ねっ、お願いします。お茶の準備は大丈夫なので。

月子、薫を二階に追い立てる。薫、しぶしぶ二階に上がって行く。月子、壁の絵も気になるが、玄関から風子の声が聞こえて来て、諦める。

風子 銀ちゃん、どうぞ。ここがあたしたち三人のシェアハウス、枇杷の家よ。

風子と銀次郎、登場。

銀次郎

おじやましますよ。ここをお友だち三人でシェアされているわけですね。なかなか雰囲気のあるいい家じゃないですか。(中庭の枇杷の木を見て)なるほど、あの枇杷の木からとって、枇杷の家ですね。さすがに、風子さんのセンスが光ってますね。素敵なネーミングですよ。

月子、二階を気にして、二階への階段前から動かない。

風子

銀ちゃん、こちらがお友だちの月子さん。ライターのお仕事をしてるんです。日本中駆け回って食材の取材して、雑誌に掲載されているのよ。

銀次郎

ライターのお仕事とは、実に興味深いお仕事ですね。初めまして、徳永銀次郎と申します。突然おじやましてご迷惑じゃなかったですか？

月子

そりゃー、迷惑ですよ。困りますよ。

月子の反応に、銀次郎と風子、顔を見合わせる。

風子

あたしが是非についてお誘いしたの。二人に紹介したいと思って。迷惑だったかしら。

月子

いえ、迷惑だなんてとんでもない。よくいらっしやいました。お噂は、風子さんから、いえ、ほかからも。いえ、そうじゃなくて、お待ちしていました。どうぞごゆるりとなさってください。

風子

(銀次郎の耳もで) 月子さん、銀ちゃんに会って、あがってるみたい。

銀次郎、かぶっていたチロルハットをとる。風子、受け取って帽子掛けにかける。銀次郎、土産のワインを月子に差し出す。

銀次郎

これ、お口に合うかどうか、皆さんお酒がお好きとお聞きしたものですから。

風子

銀ちゃんが選んだワインよ。銀ちゃん、ワインの知識もそれはすごいのよ。

銀次郎

とんでもない。風子さんのセンスの良さにはかないませんよ。

月子

(やや呆れ気味に) ご丁寧にありがとうございます。

銀次郎、壁に掛かった絵をしげしげとながめる。

銀次郎 これですね。風子さんがパリで見つけた若き画家の傑作というの。なるほど、深い！ この空間の微妙なバランス。単純な構図の中に、宇宙にも似た悠久を感じさせてくれますね。ミロの再来のようだが、さすが、風子さんの見る目は並みのものではないですね。

風子、壁の絵を少し不思議そうに何度か首を傾げてながめていたが、納得した様子。

76

風子 よかった、やっと芸術が理解出来る方にこの絵を見てもらって。ところで、(月子に向かつて) 薫さんは？ お部屋？ (銀次郎に向かつて)

もう一人の同居人、学生の時からの悪友なの。

銀次郎 ほう、薫さんとおっしゃるのですか。

風子 ありふれた名前でしょう。

銀次郎 そうかもしれませんね。確かによく聞くお名前のような。

月子 薫さんは、風邪ぎみとかで、部屋でお休みです。起こさないほうがいいと思います。何だかとっても辛そうでした。

風子 まあ、風邪なんてめったにひかない人が、めずらしいわね。今朝は元気そうだったけど。

月子 そうなんです。急に寒気がするって、さっき。

風子 そうなの？ ちょっとお見舞いがてら様子見てくるわ。月子さん、銀ちゃんのお相手お願いね。

月子 (慌てて叫ぶ) やめてください。

銀次郎、風子、月子の拒絶反応に驚いた様子で固まる。

77

月子 ごめんなさい。そうじゃないんです。今、薫さん、お薬のんで眠ったばかりなんで起こさない方がいいと思うんです。

風子 そうなの？ 残念だわ。薫さんにも紹介したかったんだけど、じゃあ、またの機会に。

銀次郎、窓から庭をながめる。

銀次郎

りっぱな庭ですね。あの枇杷の木陰に風子さんが佇んでいると、
かぶらききよかた
鏑木清方の描く美人画のようでしょうね。

風子

まあ、銀ちゃんたら。

月子

(小さく独り言) かぶらききよかたって、誰？

風子

二階のそれぞれのお部屋の窓からも、庭が見えていて、枇杷の梢がすぐそこなの。私が育てている牡丹も見て欲しいわ。そうだ、今日は暖かいし、庭の木陰で三人でお茶しない？

月子

庭で？ どうかしら。それより、風子さん、銀次郎さんを風子さんのお部屋にご案内したらどうかしら？ (銀次郎に) 風子さんのお部屋、素敵なんですよ、ゴージャスなロココ調で。

銀次郎

ほう、それは是非、ご迷惑でなければ。風子さんの趣味は、格調高い美しさがあり、日頃からその趣味のよさに感服しておりますよ。

風子

あら、そんな。

月子

ええー、ほんと、そうですね。風子さん、薫さんを起こさないように、そつと階段を上がってくださいね。ほんとうに辛そうだったから。

月子、口に指を当て、シーツという仕草をする。

風子

薫さん、そんなにひどいの？

月子

そうなんですよ。ですから、くれぐれもそつとお願いします。後で、お茶お持ちしますから、格調高いお部屋で、ごゆっくりどうぞ。

月子、二人が静かに部屋に入ったのを下から確かめてから、ソファに倒れ込む。

月子

どうしよう。どうすればいいんだろう？ こんな時。ほっておいて逃げようかしら。来るべき修羅場を想像すると、とても私の手に負えない。今、来なくてもいつかは来る惨劇。でも、今日は避けなくては。先送りすればうまく解決するかもしれない。どちらかが、いや、二人ともお別れしました、なんてラッキーなことが起らないともかぎらない。

月子、思いを巡らせているところに、薫がリビングに降りてくる。取り替えた絵を持っている。月子、ほとんどパニック状態。

薫 お客さま、もうお帰りになったの？ 話声が聞こえたような気がしたけど、静かになったから。ずいぶん簡単な打ち合わせだったのね。この絵、あなたが心配してるから元に戻しておくわね。

月子 今はだめですよ。いえ、もう遅いですよ。このことは忘れましょう。

月子、薫から絵を奪い取ると、ソファの下に隠し入れる。

薫 月子さん、そんなに真剣になるほどのことじゃないと思うわよ。ちょっとしたジョークなんだから。

月子 ジョークなんてそれどころじゃないんです。薫さん、お願いがあるんですけど、ねえ、お願い。お使いに行って来ててください。

薫 お使い？ 何なの？ 顔色悪いわよ。

月子 何だかぞくぞくするんです。寒気がして、頭もガンガンして、息苦しくて。

薫、月子の額に手をおいてみる。

薫 熱はなさそうね。

月子 何だか、すごく具合が悪いんです。こんな経験初めて。

薫 大変、救急車呼ぼうか？

月子 いえ、それには及ばないです。こんなことに税金使うわけにはいかないです。でもお願いです。薬局に行って鎮痛剤買ってきてほしいんです。鎮痛剤だったら、私持ってるから、今、取ってくるわ。

月子、二階に上がろうとする薫の体にしがみついて止める。

月子 薫さん、私の鎮痛剤は特別なんです。

月子、電話横のメモ用紙に何か書き付けたものを手渡す。もう必死の形相。

月子 ここに書いてあるものをドラッグストアに行って買ってきてほしいんです。お願いします。

薫 聞いたことない名前ね。分かった、行ってくるわ。なんだか、いつもの月子さんらしくないわね。大丈夫？ さっき、風子さん帰って来たような気がしたけど。呼んでこようか。

月子 だめです。いいえ、まだ帰って来てないです。

薫 そう？ 部屋のドアの音が聞こえたような気がしたけど。じゃあ、行ってくるわね。ほんとうに一人にして大丈夫？

月子 ええ、大丈夫です。早く行ってください。お願いします。

薫、慌てて出かける。

月子 この間に、あの口先銀次郎にお帰りいただかなくては！

月子、二階に向かおうとすると、二階から楽しげな笑い声とともに二人が降りて来る。

風子 まあ、銀ちゃんたら、可笑しいわ。銀ちゃんといると笑ってばかり。

銀次郎 風子さんこそ、ユーモアのセンスも抜群だな。人を楽しくさせる天才

ですよ。

月子 (独り言で) ほんと、口先おやじ。(銀次郎に向かって) あら、もうお帰りですか？ お茶も出さないですみません。

風子 まあ、月子さんたら、今、おいでになったばかりじゃない。よかったら、お夕食でもご一緒に。あたし、いただいたワインに合うお料理考えるわねえ、月子さん。

月子 でもほら、きょうは、薫さんが寝込んでいるから。

風子 あっ、そうだったわね。それは、またの機会にしましょう。じゃあ、お庭でお茶でも。

銀次郎、再び窓から庭を眺める。

銀次郎 ほう、確かに牡丹も見事ですな。

風子 あれ、私が丹精込めて咲かせたんですよ。

銀次郎 高貴な佇まいの中にも艶やかな美しさ、風子さんにぴったりの花ですね。ほんとうに、あなたには牡丹の花がよく似合う。

風子 まあ、銀ちゃんたら。

二人の笑い声が響く中、薫の声が玄関から聞こえる。

薫 忘れ物しちゃった。月子さんが急かせるものだから、お財布持たずに
出ちゃったわ。やっぱり、これも歳のせいかしら。

薫、リビングに入って、銀次郎を見て呆然とする。

風子 紹介するわ。こちら、万葉集の君……。

薫 銀次郎 (ほとんど同時に) 銀ちゃん、薫さん、どうしてここに？

風子 ええー！、まさか！

月子 薫 銀次郎 風子 (四人同時に) ああーっ！

四人がフリーズ状態の中、ゆっくり暗転する。ドスンと人が倒れる音がして、月子の「大丈夫？ しっかりして、救急車を呼んで」の声が聞こえ、救急車のサイレンが音楽に重なる。

5

だれもない静かなリビング。カーテンは閉められている。玄関から月子と風子の声が聞こえて、リビングに現れる。二人とも喪服である。

月子 まさかこんなことになるなんてね。人生って、一寸先は闇ですね。

風子 悲しいことだけど、あんなにぼっくりっていうのも楽でいいかも。

月子 そうですね、もう少し、人生楽しんでからでも遅くないけど、仕方ないですよね。

風子 楽しい計画が目白押しだったみたいなのにね。ねえー、薫さーん(大きな声で天に向かって呼びかけるような仕草)。

(少しの間) そこに、同じく喪服姿の薫、玄関から小走りで見れる。

薫 ねえー、二人とも、お清めの塩、使った？

風子 あー、忘れてた。

月子 私も忘れてた。玄関に戻ってやり直したほうがいいかしら？
風子 いいんじゃないの。清めてもたいして変わらないと思うわ。それに清めるってなんだかお弔いに対して失礼な気がしない？
月子 そうですね。

月子、カーテンを開ける。外から明るい日差しが注ぐ。薫と風子、疲れた様子でソファに座る。

月子 お茶入れますね。コーヒー？ それとも日本茶がいいかしら？
薫 そうだ、貰い物のカステラが、シエアの戸棚にあったと思うわ。紅茶がいいかも。
風子 そうね、月子さんお願いしていい？
月子 承知いたしました。三人の中で一番の若者ですから。

月子、キッチンに向かう。

風子 銀ちゃん、九歳もサバ読んでたなんてね。笑っちゃうわ。享年七十六歳っ

て聞いて、もうびっくりしちゃった。

薫 あなたもサバ読むの、ひかえておいたほうがいいわよ。

風子 あら、あたしは、たったの五歳だもの。

薫 今は、五歳でも、そのうち歯止めがきかなくなってドンドン増えているのよ。銀ちゃんくらいの歳になったら、あなたなら、平気で十も十五もサバ読むんじゃないの？

風子 それって、あたしがいつまでも若々しいってことかしら。ちょっとは自信あるけど。銀ちゃんも、若く見えたわよね。すっかり信じてたもの。

そこに、月子、お茶とお菓子の盆を持って現れる。

月子 銀次郎さん、まさか、ここで倒れてそのままってことになるなんて。おかげで、私、何の関係もないのに、お葬式まで参列して、妙な感じだわ。

薫 娘さん、感謝してたわよ。残念なことにはなかったけど、あなたの迅速、適切な対応にね。

風子 やっぱり、月子さんね。社会的訓練が違うわ。あたしたちは、おろお

ろしてただけだものね。あたしたちに何かあった時もよろしくね。
約束出来ません。私が一番先に逝くかもしれません。

薫 そうねえ、誰が一番でもおかしくないものね。

風子 あの日、銀ちゃんが家に来たあの日、月子さんのあの慌てよう、可笑しかったわね。

月子 笑いごとじゃないですよ。あまりの展開にどうしようかと思っただわ。でも、二人とも気が合うんですね。昔も今も同じ人を好きになるなんて。まったくね。つまらないところで、気が合うのよね。今だから言うけど、平太さんがあなたと結婚する前、私、平太さんとお付き合いしてたことがあるのよ。

月子 ええー！ 風子さんの旦那さんですか！

風子 嘘に決まってるわ。嘘でしょう？

薫 ええ、嘘よ。

月子 もう、薫さん、やめてくださいよ。そんな笑えない冗談。

風子 ほんとに、この人って意地悪なんだから。人をどきっとさせて面白がってるのよ。

薫 でも、今、ちょっとドキッとしたでしょう。

風子 その手にはのらないわ。平太はね、仕事一筋でちっとも優しくなかつたけど、そういうことは、隠せないタイプなのよ。

月子 でも、平太さん、亡くなってますから本人に確かめようもないですし、もし、何かあったとしても恨み言も言えないですね。

風子 あなたまでやめてちょうだい。もっとも、どうだっていいわよ、過去なんて。あたしは未来しか見ない主義なの。

薫 私たちに未来はあるのかしら。

風子 いやーね、そのネガティブな発想。あるに決まってるわよ。幾つになっても未来はあるわよ。そりゃあ、昨日生まれたばかりの赤ん坊と比べたら未来の時間は短いでしょうけど。

薫 赤ん坊を比較対象にもつてくるところは、さすが強気ね。

月子 それにしても、銀次郎さんて、もてたんですね。お葬儀に女性がたくさんいらしたわよね。ほら、中には、人目もはばからず、さめざめと泣いてた人、いましたよね。

薫 私たちときっちり同年輩の、あのご婦人方、やっぱり、何かの会で銀ちゃんに声かけられたのね、私たちみたいに。

月子 銀次郎さん、それなりにもものすごく努力してたんでしょね。あちこ

ちのカルチャー教室に顔出して、女性を誘っていたわけでしょう。体力も知性も並大抵じゃ務まらないと思うわ。

風子 そうねえ、たいした情熱よね。

薫 つくづく銀ちゃんの口のうまさは天才的だったな。あなたは、こんな僕みたいな何の取り柄もない男を、もしかしたら、僕はいい男かもしれないと、錯覚させてくれる。あなただけです、そんな人。なんて、普通、言えないよね。

風子 ほんと、可笑しいね。

三人、静かにお茶を飲む。

風子 (思い出したように、薫に向かって) さっきの話、嘘よね。

月子 (二人を見比べながら) 何の話です？

薫 ええ、嘘よ。

「オンリー・ユー」の音楽の中(幕)